

序 中村敬宇と『同人社文学雑誌』（明治九一十六年）

陳 力衛

一 自助的な人

中村正直（一八三二—一八九一）は、明治時代の啓蒙思想家であり、敬宇は号である。幼少期から漢学を学び、儒学者佐藤一齋門下の逸材だけとあつて、漢文に造詣が深く、儒教經典に精通していた。基本は朱子学を奉じたが陽明学にも心を傾けたようである。彼は安政二（一八五五）年に昌平坂学問所の教授方出仕となり、文久二（一八六二）年には三〇歳の若さで儒者に列せられて、幕府儒官最高の地位についた。漢学以外、十六歳の時ひそかに蘭学を学び、さらに安政二年には英語にも手を広げた向学的な人であった。

これまでの敬宇研究を伝記・文学・思想・教育・宗教の五つの分野に分けてまとめながら、課題を提出している遠藤道子の「中村正直の生涯―留学願書を軸として」において、敬宇の生涯を四期に分けて、誕生から十五歳までを第一期、蘭学を始めた十六歳から留学願書の「留学奉願候存寄書付」を出すまでを第二期とする。つまり、慶応二（一八六六）年には留学生監督としてイギリスへ渡航したことを第三期の始まりとする。イギリスでの留学経験は彼の思想を一変させた。幕府の崩壊により明治元（一八六八）年六月帰国、徳川家の遺臣として、静岡学問所の教授に就任し、そこでいわゆる近代啓蒙に着手したのである。「もともと敬宇は、日本を近代化するには制度の変

革も必要であるが、根本的には日本人の精神構造を変革することが必要であると考^(注1)えていた。」から、明治三年から四年にスマイルズの『セルフ・ヘルプ』を『西国立志編』（一名自助論）に翻訳、出版し、翌五（一八七二）年にはJ・S・ミルの『オン・リバティ』を『自由の理』として翻訳した。当時の人々に自主自立の思想を呼び起こすことに貢献したことが知られている。「曰く労作、曰く忍耐、曰く品行、曰く勉勵、曰く自由、曰く独立、曰く誠実、曰く剛毅。凡て是等の者は、泰西文明の由て来る原動力なるとを識認し、直に斯教を以て我國民を化せんとせり。」（徳富猪一郎『人物管見^(注2)』と評価される。

明治六年に東京に呼び戻され、大蔵省翻訳局にて委託翻訳をし、『英国律法要訣』第一篇を訳し終えている。そして自宅で同人社を設け、のちに福澤諭吉の慶應義塾や近藤真琴の攻玉社と並び称された。明治六年、学術団体「明六社」に参加し、『明六雑誌』に論説を発表して啓蒙思想の普及に努めた。『明六雑誌』が停刊した後の明治九（一八七六）年には『同人社文学雑誌』を創刊し、和文と漢文両用に、歴史、伝記、学術、政治、宗教、哲学、詩歌など多岐にわたる一種の文化雑誌を作り上げた。

明治八年、敬宇が東京女子師範学校摂理となる。女子教育には熱心で同人社女学校も開設した。明治十年、東京大学文学部嘱託となり、十四年教授となった。明治十二年、東京学士会院開設に当たって創立会員に選ばれ、同院の雑誌に多くの論説を発表、学者として最高の地位を得た。また、芳川文相から『教育勅語』草案起草も托されながらも、最終的には採用に至らなかった。この時代の著述活動にはスマイルズ『西洋品行論』（明治十一―十三年）、エマソン『報償論』（明治二十一年）や『自叙千字文』などがあり、明治二十一年には最初の文学博士授与の一人となった。さらに政治関係では元老院議員、東京市会議員、ついで二十二年貴族院勅選議員となった。^(注3)

遠藤道子のいう第四期は明治十年四十六歳で東京大学文学部嘱託となるのを始まりとしているが、前田愛はそれ

より早く、明治八年東京女子師範学校の開校式は「敬宇にとつていわば明治政府への忠誠を誓う宣誓式であった。女子師範学校摂理をふり出しに、敬宇はその後の十五年間、着実に明治官僚機構のパイプを上昇していく。」^(注4)という。したがって、「それは維新後数年間の中断を間に挿んで、同心の子から昌平黌教授にまで累進したかつての立身出世コオスに接続していたのである。」^(注5)と前田愛はそう位置付けている。たしかに第四期で見せた中村敬宇の立身出世はまさに儒学の伝統的な「学而優則仕（学びて優なれば則ち仕う）」『論語・子張』の道を歩んだことになる。

明治二十三（一八九一）年六月、六十歳で亡くなった敬宇に対して、徳富猪一郎は、福澤諭吉と対照的に、敬宇を「君子国の真君子」と題して、『人物管見』の中で次のように評している。

翁の同人社は慶應義塾の敵にあらず、翁の立志篇品行論は、西洋事情文明論の概要程、直接に天下を動したるにあらず。翁の同人社文学雑誌は、以て学問の勧めに対す可くもあらず。翁は福澤君の好敵手にあらず、翁又た之を願はず。翁は何人とも争ふ所なし、何ぞ福澤君と争はん。

と、敬宇の「何人とも争ふ所なし」の人柄を際立たせている。同様の比較は透谷の「明治文学管見」（一八九二―九三）にも見られ、前田愛はそれを引用しながら、次のように評している。^(注6)

透谷は明治初期の錯綜した精神状況を規定して、……「変遷の時代」に、その「尤も視易き標本」として「旧世界を抛げ」て「新世界に於いて拡大なる領地を有」する福澤諭吉と、新旧両世界が「奇有なる調和を保つこ

とを得」た中村敬宇の二人を抽出する。

つまり、旧世界と徹底的に決裂する福澤諭吉に対して、つねに新旧両世界の融合を求めている中村敬宇の人間像を浮き彫りにさせている。

最初の伝記『中村正直伝―自助的人物典型』（成功雜誌社、明治四十年）を書いた石井研堂は、書名の通り、敬宇を自助的人物の典型と見なし、「天壤の有らん限りは、先生当に、文学の神として、道徳の神として、永く祀祀せらるべきなり」と高く評している。

敬宇は博学で、学は東西を兼ね、多くのすぐれた文章を残している。「明治の作家で後世に必ず伝えるべき文字といえは、敬宇を推すであらう。」と言われるくらいである。その著書には弟子の編集によって『敬宇文』一冊、『敬宇中村先生演説集』、『敬宇文集』六冊、『敬宇詩集』四冊などが出版されている。敬宇の亡後、吾妻兵治はその文章を集めて『作文軌範―学生及青年之修養良材』（文正堂書店、大正六年）を出した。

二 同人社文学雑誌

小石川江戸川邸内に開設した同人社が「開業したのは明治六年二月で、その源流はすでに静岡時代にあった」（高橋（一九六六）一一八頁）という。たしかに敬宇の「明治十五年十二月二十五日江東中村楼ニ於テ同人社親睦会ノ時演説」に対して、「蓋同人社創立於明治五年壬申至今歳十易寒暑矣」という大野太衛の識語通りなら、明治五年の創立から数えると十年を経たことになる。同人社には英学・漢学・数学の科目があり、明治初年の代

表的洋学塾であった。静岡時代の敬宇の友人クラークがバイブルクラスをも開いた。またこのころ、敬宇はメソヂスト教会宣教師O・カックランと知り、同人社の日曜日説教を托すようになった。敬宇はキリスト教に傾き、明治七年十二月、養子一吉とともにカックランから受洗した。

同人社には当初二百五十余の生徒がいた。明治二十二年九月以降、敬宇は事実上その経営者ではなくなり、後に東京英語学校に併合されて廃校となった。「同人社は先生とその生命を同うせしが、其の弱三十年間出入せし所の生徒は、満を以て算すべく皆出てて社会の各方面に頭角を露はせり」とその果たした啓蒙教育の成果が評価されている。

同人社の機関誌として『同人社文学雑誌』が創刊されたのは明治九年七月である。前年の明治八年七月の太政官布告（新聞紙条例及び讒謗律）によって政論などが制限され、『明六雑誌』もそのあおりを受けて廃刊されるようになった。『横浜開港五十年史下巻』（横浜商業会議所、明治四十二年）によれば、同時代誌には、

『洋洋社談』（明治七―十六） 和文

『同人社文学雑誌』（明治九―十六） 和文・漢文

『東洋新報』（明治九―十二） 漢文

『東京新誌』（明治九―二十） 変体漢文

というのがあり、和文を中心とした『洋洋社談』に対して、『同人社文学雑誌』は和文・漢文を混ぜているが、次第に漢文の比重が高くなっている。逆に漢文一色の雑誌『東洋新報』は『同人社文学雑誌』にも寄稿する岡本監輔によって編集・発行された。論説はもちろん、他の新聞などの和文記事をわざわざ漢文に訳して載せていたほ

ど、一定の読者層を見込んでいたのであろう。さらに服部誠一による週刊誌『東京新誌』もやはり漢文を主とし、仮名交り文の戯文や、著名人の艶聞や政治への諷刺批評などを縦横して、当時としては多くの発行部数を得た。それに続く同様の内容の『吾妻新誌』も発行したが、明治二十年頃にはそうした漢文系の雑誌がだんだん下火になってしまった。

杉本（一九九九）『明治の文芸雑誌―その軌跡を辿る―』によれば、『同人社文学雑誌』は「社友中ノ詩話文談、凡ソ学問文芸ニ関係スル古今中外一切ノ談論ヲ集録シ」、「旧聞ヲ濯テ新見ヲ容ル、ヲ貴ブ」を目的とした。このことから月に二回の発表を活字にする当時の『洋洋社談』や『明六雑誌』の編集と似ている。

第一号から四十五号は和半紙二つ折で、八葉十六頁だったが、四十六号以降は洋紙仕立てとなり、二十二頁に増した。基本的に本誌は五号活字を用い、二五字×一二行で組む。表紙に目次を印刷。最初の二十号まではタイトルのみで、二十一号から著者名も入れるようになった。見返しにことわざ・格言（英語の原文とその訳文）がある。第一号は明治九年七月八日刊行〔内題〕。奥付では「編集長 中島雄、出版人 木平讓」とある。毎月二回発行とされるが、十月十四日の第七号に続いて、二か月後の十二月二十三日に第八号は発行など、初期では毎月二回を守らなかったことがある。同人社本局を東京小石川江戸川町十七番地に置いてある。印刷完捌所は東京葉研堀町三十三番地の報知社になっている。第一号の明治九年七月から七年間続き、明治十六年五月の九十二号で幕引きとなった。

『東京新聞雑誌便覧』（法本書屋、明治十五年）によれば、月に二回の発行、壹部金四銭、半ヶ年金四十二銭、一ヶ年金七十二銭となっている。『團圓珍聞』（珍聞館）の一八八一年七月から八月号に五十六号から五十八号の広告も載せている。

『同人社文学雑誌』は編集者（中島雄一―十五、斎藤幹十六、安藤勝任十七―二十七、木平讓二十八―三十四、吾妻兵治三十五―七十三、千賀鶴太郎七十四―九十二）の変更によって区分することも可能であるが、大きな変化はやはり明治十年九月三日発行の第十七号に見られる。その奥付の「告白」によれば、「前キニ芝公園地日清社ニテ刊行ノ寰海新報^{（註）}ハ此文学雑誌エ合併」したことにある。つまり中国人の王治本（号漆園）の文章をはじめ第十七号に載せることになる。O・ウェードの『語言自邇集』を編集しなおした広部精（一八五八―一九〇五）の『亜細亜言語集』（明治十年刊行）に王治本と中村敬宇の序文があることから、もともとつながりがあるだけでなく、この書物は近代日本における中国語教育の重要なテキストで、「今世人之汲々於学唐話者以其便交際也」（敬宇序）とあるように、中村敬宇自身の中国語学習もここからスタートしたのかもしれない。

現存する『同人社文学雑誌』の所蔵を確認すると、恐らく二種類の系統がある。一つは単行本の形の流布であり、早稲田大学所蔵の『同人社文学雑誌』乾坤二冊（洋学文庫八・C507）と国文学研究資料館にある六十六号から七十三号までの合本（請求番号00396）からはその様子を窺うことができる。サイズはともに一八一×一二四mmである。もう一つはいわゆる合冊本であるが、サイズ（一七〇×一一四mm）は前者よりやや小さい。これも二種類があり、一つは明治十四年二月十日発兌の四十六号の奥付頁の「社告」に示されたように、四分冊に分けられている。

従来本誌合本四方ノ注文陸続絶エザリシモ何分不揃ニテ其需ニ応シ兼子タリ因テ此般読者ノ便宜ヲ計リ更ニ缺本ヲ摺立左ノ期日ヲ以テ発売致スヘシ但日本仕立

一―十、二月十五日出来 定価三拾銭
十一―二十、二月廿五日出来 定価三拾銭
二十一―三十、三月二十日出来 定価三拾銭
三十一―四十五、四月二十日出来 定価四拾五銭

明治十四年十月十日発兌の六十二号の奥付頁の「社告」に、「文学雑誌合本第五 自第四十六号至第六十号十五冊分 西洋仕立 一部定価五十銭」とあり、続いて翌明治十五年六月二十日発兌の七十九号の奥付頁の「本誌合本広告」に、「文学雑誌合本自六十号至七十五号十五冊綴西洋仕立一部定価五十銭」とあるように、十五冊ずつ合本を作っているが、七十六号から最後の九十二号までの合本の広告は見当たらなかった。

架蔵の三冊和装本は、「文学雑誌」の一―十、十一―二十、二十一―三十号である。各号の表紙には「同人社文学雑誌」の下に「同人社蔵記」という十五mm四方の朱印が押されてある。第一号から十五号までの本文頁の右上に縦長の朱印「時習堂図書章」（三五×十五mm）があり、十六号、十七号はその下にさらに「蘭畹書屋」（四十×四十mm）の朱印が追加されている。十八号からそれしなくなり、「時習堂図書章」の位置と取って代わられた。二十五号から二十七号の同じ位置に今度は同じ大きさの方印「時習堂記」が押されていた。二十八号から三十号には何も押されていない。ちなみにこの三冊目の二十一―三十号の表紙部分は全部最初に載り、各号の前にはついていないのが特徴である。

もう一つは同じ合冊本でありながら、一―四十五、四十六―六十七、六十八―九十二号の三冊である。架蔵本はその一冊目を欠き、二冊目の最初の四十六号の表紙にはいままでと同じく「同人社蔵記」の朱印があったが、四十七

号からはやや大きめの「同人社文学雑誌之記」の印となって、最後の九十二号まで変わらなかった。そして「秦所蔵」と「肖水文庫」という所蔵者の朱印が押されている。前者はよくわからないが、後者はかの有名な近世文学の大家山口剛の旧蔵印であった。内容的には本来単行本と合冊本は同じはずだが、最後の九十二号において、単行本の二〇頁に佐藤麟角の「嶋原行」があるのに、合冊本ではそれが削られていた。

日本近代文学館編『複製日本の雑誌』では『文学雑誌』第一号を「復刻」したが、基本的に漢文の部分を削除し、和文だけを残すところからみれば、「文学」の二文字にひきつけられながらも、和文を中心とした近代文学のとらえ方が変わらず行われている。

現在はナタ書房のマイクロフィルム版（五山堂書店発売、一九八七）があり、利用しやすくなっているが、欠頁や不鮮明な箇所がある。

三 近代啓蒙のさきがけ

高橋（一九六六）によれば、『同人社文学雑誌』（一一九十二号）は和漢文をしめて計六五〇弱の文章があり、野村（二〇〇七）の表1「同人社文学雑誌目次」には六三〇がある（欠号が数えられていない）。「社長中村敬宇の作品が最高で百八十余り」（高橋（一九六六）二〇四頁）を載せている。いわゆる「文学」を冠した最初の雑誌として知られるが、先行研究でも指摘されたように、ここでの「文学」はより広い意味での人文学全般を意味するもので、同時代の中国の用法（例えば『文学興国策』（一八九六）と同様である^{〔註1〕}）。

中村敬宇によって在華宣教師たちの著書（漢文、英文）から訳されたものもある。中でも『中西関係略論』の和

訳が有名である。それは明治五年にはキリスト教信仰の自由を主張する『泰西人ノ上書ニ擬ス』を匿名で発表したことに起因する。政府の外教弾圧に対する抗議でキリスト教が西洋文明の精髓であると説いた。このうちに天皇が率先して受洗せよとする。この漢文は日本に先んじて、一八七二年六月に「擬泰西人上日本國君書」と題して中国の『教会新報』（二十二日、二十九日）にも載せ、さらに一八七七年二月再度「擬泰西人上書」のタイトルで『万国公報』（三三八六―三三八九頁）に載せることができた。いずれも「日本人」という匿名であったが、後者にはさらにA・ウィリアムソン（Alexander Williamson、中国名、韋廉臣、一八二九―一八九〇）による八百餘字の推薦文がある。^{〔注12〕}驚くことに広東でも七頁の小冊子として発行されている。^{〔注13〕}のちに彼のキリスト教信仰関連の文章は同時代の『東京新報』（十字社、一八七七）に載ることが多い。

中村敬宇の洋学への接近は佐久間象山（一八一―一八六四）とも関係している。二人はともに佐藤一齋に教わっている。島国の閉鎖的思考から諸外国の発達した文化をとり入れて、日本の自主的開港によって、国家の発展を願った象山の開国論に敬宇も共感を持っていたのであろうか。二人は吉雄権之助の日蘭漢の三か国語辞書に対する関心が共通している。象山の『増訂荷蘭語彙題言』（一八四九―五〇）を受けて、敬宇の書いた「穆理宋韻府鈔叙」（二八五五）が再度『同人社文学雑誌』第七十六号（明治十五年五月十日）に収録されている。丸山真男「幕末における視座の変革——佐久間象山の場合——」（『忠誠と反逆』）によれば、「彼が深く傾倒した聖人の道と儒学の諸々のカテゴリーに対して最後まで執着しておりました。象山において易学の理も「西洋詳証術」の理も、根本において同じ真理でした。つまりどこまでも朱子学の精神に随って、それを媒介としてヨーロッパ自然科学を勉強していく」という点において、キリスト教を信じていながらも儒教を捨てたわけではなく、両者の一致点を見いだそうとしている敬宇も同じである。

明治十八年の「漢学不可廢論」において、「支那ノ書ヲ英語ニ訳シタルモノ数多アル中ニ英人メドホルスト氏ノ譯セル書經ヲ余ハ三十年前之ヲ得タリ」とあり、いわゆるW・H・メドハーストの英訳を通して漢学を見直す考え方ももっている。敬宇自身は一八六五年からメドハーストの英華字典を勝海舟から借りて写したことが知られている。さらに敬宇自筆の蔵書目録にはW・ロプシャイト英漢辞書とされたものが一冊あることから、彼の英学への関心はモリソン、メドハースト、ロプシャイトへと続いていることがわかる。事実、ロプシャイトの英華字典を底本にして翻刻した同人社メンバーの津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳、敬宇校閲の『英華和訳字典』（一八七九―一八八一）がある。そこにある川田剛の序文によれば、当該辞書に見られる和漢洋三体文字必修の発想などは初期の英学の状況の反映である。そして、日本語の後にローマ字でその読み方を示す方式は外国人に日本語学習の便宜を与えるという想定のもとに原書の記述方式をも自己の流儀に翻訳したものである。これもまた過渡期の辞書のひとつの特徴と見られる。やはり「蘭英漢」三か国語辞書に刺激を受けているように見受けられる。彼自身の訳著にもその利用が見られる。明治六（一八七三）年の翻訳になる『自由之理』に使用された訳語の中にロプシャイトの訳語と一致するものが多いことが森岡健二氏によって調査発表されている。同じことは、『西国立志編』でのロプシャイトの英華字典の使用も木村秀次『近代文明と漢語』（おうふう、二〇一三）において論証されている。

敬宇以外の執筆者は同人社メンバーを中心とした中島雄、安藤勝任、信夫恕軒、吾妻兵治、大野太衛のほか、東大関係者の井上哲次郎、重野安繹、その他の津田仙、柳田信大、西村茂樹、栗本鋤雲、副島種臣、末松謙澄、東条世三などが挙げられる。また漢学者の大槻盤溪、岡千仞、岡本監輔、内藤耻叟、三島中洲、亀谷省軒、森春濤、広部精なども寄稿している。よって「文章の形式よりみれば、総題数六百五十弱のうち日本語で記された文章が約百三十、残りが漢詩文で、数の上では後者の方が多い。」そして「政談が少ないのが特徴」というのも敬宇の旧幕

臣の立場と関係してくるようであるが、そもそも「新聞紙条例及び讒謗律」による縛りが多かったであろう。

翻訳史の視点から見れば、『同人社文学雑誌』が近代知識の伝播という役割を果たしている。まず翻訳の実践として巻頭にある西諺・格言をはじめ英詩や西洋著名人の伝記など多くの翻訳作品を載せているだけでなく、近代啓蒙期に見られる西洋の最新の学問や思想や知識などを紹介している。そのため思想や知識のほか、その新概念の媒介である新漢語の生成と伝播の役割を考察するにも好都合であった。「西洋趣味多し」と評されるゆえんでもある。まず毎号の雑誌の見返しに西諺・格言を載せることである。これは西洋思想・精神の伝播を助けるもので、最初の一号から二号は中村正直訳『西国立志編』からの抜粋で五項目の和語訳であったが、ほかに八号、九号、十号の十項目を除き、それ以外はすべて漢文訳となっている。拙著『日本の諺・中国の諺』（明治書院、二〇〇八）において、和漢の諺の由来を検討しながらも西洋の諺・格言の日本的導入と中国への影響について課題としてきた。『同人社文学雑誌』における諺・格言の漢訳はそういう伝播に一つの可能性を示していた。例えば、『西国立志編』序文にある Heaven helps those who help themselves を「天は自ら助くる者を助く」と訳したが、『同人社文学雑誌』第一号では「神ハ自カラ助クル人ヲ助ク」と、主語は「天」から「神」へと変わっている。のちに日本に亡命した梁啓超が横浜で発行している『清議報』では『西国立志編』の紹介とともに「西諺曰、天常助自助者」と中国でなじみの「天」を使っている。^{（注14）}

野村（二〇〇七）の『同人社文学雑誌見返し』の「表2」によれば、西諺・格言の収録は全部で七百を超えている。中村敬宇の「東西聖賢ノ格言要語ヲ撰ビ修身教課書ヲ編成スルノ意見」（三十号）は如実にその目的を表している。それは同じ同人社のメンバーにも受け継がれている。例えば、大野太衛『泰西格言』（一八八三）と吾妻兵治『英漢和对譯泰西格言集』（敬文館、一九二二）がある。

吾妻兵治による翻訳作品は多く、漢文伝記「英王阿弗勒紀」十九号、「奢氏伝略」二十号、「記額蘭德君夫人之話」五十号、「華盛頓行状」七十一号のほか、和文による「貴族論」「英儒陪根文集抄訳」六十一号、「論富有」「培根文集訳」八十一号の翻訳もあった。特筆すべきなのは日本へはじめて英詩訳（十五首）が紹介されることであり、明治十一年の三十四号に載せている。

人生（ベレイ）、人生（ドッドリッジ）、人生（ジョン、マスソン）、以善報悪（チルロットソン）、自足（シェーキスベニア）、行善（セネカ）、娯楽（ボルンス）、人事之潮水（シェーキスベニア）、卑賤之幸福（シェーキスベニア）、力勤（フランクリン）、良心（フォルレル）、良心（ミルトン）、懶惰（ヒルハウス）、貴人之憂慮（シェーキスベニア）、自敬（シェーキスベニア）

欧米の言語から訳されたものには、東条世三の和訳が挙げられる。誌上掲載の十八篇のうち、主に和文に翻訳していたのだが、公益心「李拔（リーバー）^{（注15）}氏著政治修身論抄訳」やスペンサーの経世学からの抜粋訳がある。のちに雑誌『青春会文学雑誌』（八）（青春会、私立刀川英学校内一八八九年四月）に転載されたのは『同人社文学雑誌』五十三号にある「権利義務之関係」（東條世三訳）であった。

また、この雑誌を実践の場として多くの漢文を載せていた。「詩や文章を蒐め、且つ西洋の新知識を紹介した。漢文に長じてゐた爲め、西洋の思想を、頑迷固陋なる漢学者の間に擴めるには甚だ好都合であつた。」（宮島新三郎『発祥時代の明治文化』『明治文化発祥記念誌』大日本文明協会、一九一四）と評されたように、漢学好きな人々への啓蒙思想の伝播に大いに寄与していたのである。

四 漢詩・漢文を中心とした日中文化人の交流

前出の徳富猪一郎『人物管見』では、

翁の老友大槻磐溪、嘗て曰く、氏三十年の功を以て漢籍を研究し、六年の力を以て洋書を讀むと。亦以てその漢字に涵養せられたるの久しきを知る可し。

と、敬宇を洋学者よりむしろ漢学者と見なすべきことを言っている。同じことは前出の遠藤（一九六六）にもみられる。

明治七年より十五年まで彼が「同人社」より出版した文学雑誌と銘うつ文学・教育・思想・歴史等多方面にわたる「同人社文学雑誌」を、それ自体また文学史の上で検討してみる必要がある。また彼はたぐさんの漢詩、漢文集をかいている。彼の東京大学での講義は漢学、支那哲学であった。学問としてもっとも造詣が深かったのは漢学であろう。それは彼の蔵書三万冊余りの殆んどが漢籍であること、聖堂の儒者であったことから察しられる。彼自身西欧一辺倒となる社会風潮の中で、明治八年「支那不可侮論」を明六雑誌に書き再び十八年「漢学不可廢論」を書いている。

実際に、同人社メンバーはこの雑誌を通して在東京の中国人王漆園、沈子星^(注16)、清国公使館員の何如璋、張斯桂、

黃遵憲、黎庶昌、姚文棟、陳允頤、黃錫銓、また朝鮮人の兪吉濬、尹致昊などとの交流の輪を形成している。そして中村に中国語を教え、漢詩集編集し、序文を書いた張文成もいる。具体的に蒲生重章による漢文の「自由園雅集記」（『襲亭文鈔初編』明治三十一年）において明治二十二年五月十九日に清国公使および日清の賢人十一名を、小石川の江戸川端大曲の旧内藤邸にある敬宇の自宅の庭園自由園に招いた様子を描いている。その中で、「座有張君者。亦清人。年最少。寓敬宇家。肄業文字。敬宇亦就學唐音。」と、敬宇が張文成について中国語を習っていることも記している。たしかに「敬宇先生は『詩経』を読むとて、あるいは訓読し、あるいは支那音で棒読みにし、教場をぐるぐる吟じ廻ったりした。長崎で支那音を学んだので、それを教えようといった。」（三九頁）という三宅雪嶺の自伝にも中国語で詩経を読む様子がみられる。

その日中間の交流の実態がこの『同人社文学雑誌』に多く反映されているにもかかわらず、いままで見過ごされたものも少なくない。例えば、この雑誌に載る清国公使館員の黄遵憲の文章が意外にも中国で編集された彼の全集には収録されていない。このように日中文化人の交流の場としての役割と実態を明らかにすることができる。

中村敬宇を中心としたこれらの同人社メンバーの輪はさらに広がり、アジア主義の萌芽をはぐくむことはまさに同人社における日中韓三国の交流に起因するのであろう。後に同人社メンバーが対中翻訳事業へのかかわりを持つようになる。善隣訳書館の創設はその最初の一步であらう。狭間（二〇〇二五頁）によれば、「一八九九年上半年頃、岡本監輔や吾妻兵治が発足を準備していた」という。そのことはむしろ『清議報』第二冊（光緒二十四年十一月二十一日）一八九八年十一月にすでに「善隣協会主旨」を以下のように掲載している。

欲提供日本經驗支援隣国、依此成立的『株式会社善隣譯書館』也是說「支那之維新業已萌芽……首先要普及我

新書以啓彼知見……」、即日本維新後、靠外国書而左右了「国民的腦力」、這一方法也準備向清国普及。「且吾館新書普及之日則是剔去空文虚礼鼓吹新知實學之時」。就此、清國的督撫道台等「大贊吾館之美學」。

つまり、維新後外国書物によって国民の腦力を左右した日本の經驗を隣国に提供し、空文虚礼を廃し、新知實學を中国へ普及させようと目論んでいる。そして、最初に翻訳し、中国へ売り出しているのはほとんど同人社のメンバーがかかわっている。

* 國家学 伯崙知理著、吾妻兵治訳（善隣訳書館、一八九九）

* 戦法学 石井忠利著（善隣訳書館、一八九九）

* 大日本維新史 重野安繹著（善隣訳書館、一八九九）^{（註17）}

* 日本警察新法 小幡儼太郎（楽山）訳編、王治本校（善隣訳書館、一八九九）

また、井上哲次郎の『訂増英華字典』はこの時流に乗って中国でも販売しはじめている。

五 本研究の経緯

九十二号をもって『同人社文学雑誌』の突如の停刊には何の説明がなく、推して考えれば二つの要因がかかわっている。一つは敬宇自身が東京大学の教授となり、出世立身が達成されながらも明治十六年以降、いわゆる大部のまとまった著述がなく、その前の序跋辞退と合わせて、自分の時間が欲しいという個人的な理由から来るものである。二つ目は、明治十四年創刊された東大関係者を中心とした『東洋学芸雑誌』（一八八一—一八八八）の存在で

ある。『同人社文学雑誌』に載せた文章が後に『東洋学芸雑誌』に転載される事が増えてもその逆がないということは、同人社の方は格下に見られ、同じ東大教授になった敬宇にとってもどかしいものであったのである。文体の面からみても、『同人社文学雑誌』は和文の占める割合が号を追うごとに減り、漢文が主となっていった。一方、『東洋学芸雑誌』は和文が中心で、漢詩文が一割程度を占めるに過ぎず、書き手、読み手が広がっていたのである。

また、同じ漢文でも、敬宇の添削を受けた三宅も『三宅雪嶺 自伝／自分を語る』（日本図書センター、一九九七）に当時の様子を振り返って次のような問題を提起している。

当時漢学が復興し、漢文が頗る盛であつて、重野（安繹）氏と河田（川田甕江の誤り）氏とが兩大関、それから関脇小結等が並んで居る。島田（重礼）は重野側、信夫（恕軒）は河田側とか、それぞれ派別した。詩では大沼枕山、小野湖山、鱸松塘、森春濤という所がある。文芸雑誌といえば、漢文を以てするのが多く、「東京新誌」というは殆ど全部風俗壞乱的の漢文で満たされた。世間で漢文が普通になり、作文といへば漢文を意味し、仮名交りは小学に限るかに聞える。自分は始め島田氏の添削を受け、次に三島（毅）氏の添削を受け、後に中村（正直）氏の添削を受けたが、三島の代に問題となつたのは外でもない、漢学から入り込んだ漢文と、洋学から入り込んだ漢文と趣を異にし、いずれが宜いかというに在る。前者は用語簡潔、意義深長でも、筆が洩つて窮屈に過ぎ、後者は意の儘に感想を發表しても、同じ事を繰返し無駄が多いのであつて、漢学的漢文は軌範（『文章規範』）又は八家文（『唐宋八家文』）を標準にし、漢学者の受けが宜く、洋学的漢文は思想に富んでも外道扱いにされた。（一二二—一二三頁）

つまり、文体的には「漢学から入り込んだ漢文と、洋学から入り込んだ漢文と」があり、前者は中国の漢文の流れを汲むが、自作の漢文はなるべく前者に随うが、後者の翻訳から入った漢文となると、どうしても原語の要素を反映させる必要があり、いわば日本の漢文の展開の中で翻訳文体に刺激され独自の性格を持つものと見られる。『同人社文学雑誌』においてはまさに両者のせめぎ合いを見せている。両者の文体的異同と相互影響は研究すべきテーマの一つとなっている。

こうしてみると、文体の問題を念頭に置きながら、明治以降、和漢の相対化が進み、漢のほうを疎かにしてきたせいもあって、『同人社文学雑誌』における漢文の多用が一方ではその研究の停滞をもたらすことにつながったと考えられる。ゆえに本雑誌に載せている日中文化人の交流や、とくに漢文文章がいかにかに中国の知識人に受容されていたかについて、ほとんど研究されなかったものと思われる。よって、近代知の生成と伝播という視点からその広範な内容を見直さなければならぬと考えている。

幸いに編者が成城大学民俗研究所の所員をつとめている関係上、二〇二三年度から成城大学民俗学研究所研究プロジェクト「中村敬宇主宰の『同人社文学雑誌』(明治九一十六)についての研究」を立ち上げ、日本国内の研究者、閻小妹、王宝平、木村一、木村義之、喬志航、吳燕、張明傑、陳繼東、陳捷、李長波、李梁で構成されている。そして三回の研究会を行った。

第一回研究会 二〇二三年五月十三日(土)

陳力衛「『同人社文学雑誌』の研究および資料整理の現状」

陳力衛「同人社メンバーによる対中翻訳事業の展開―井上哲次郎の普通学講習会を中心に―」

第二回研究会 二〇二三年九月二十三日(土)

1 李長波(同志社大学)「『同人社文学雑誌』の書誌と解題のために」

2 王宝平(二松学舎大学)「明治時代に来日した中国民間文化人王治本について」

3 潘光哲(台湾中央研究院近代史研究所)「近代中国知識人の東学閱讀史」

第三回研究会 二〇二四年二月十六日(土)

1 郭夢垚(神奈川大学)「清末の中国人日本留学生の団体活動と『訳書彙編』」

2 陳力衛(成城大学)「東亜公司による中国語書籍の出版」

本書の執筆者は上記のプロジェクトのメンバーであり、それぞれの面から『同人社文学雑誌』へアプローチしている。序文のほか、全体として基本的に二部立てとなっている。まず章清・陳力衛の「近代知としての日本漢文と中国的受容」は日本漢文の流れをたどり、近代における同人社のメンバーによる中国への知的伝播も視野に入れている。そもそも中村敬宇の漢文への関心から『同人社文学雑誌』へ着目するようになったといっても過言ではない。そこで人物編としてまず李梁の「中村敬宇の自然史志向性に関する一試論」は思想的視点から中村敬宇を読み直そうとしている。それに続いて陳捷の「『同人社文学雑誌』と来日した中国の人々」は『同人社文学雑誌』にかかわった中国人を中心に展開された論考である。続く王宝平の「明治期来日中国民間文化人王治本について」は具体的に敬宇と深く交流している王治本を取り上げている。王治本はこの時代の日中交流の具現者であり、同人社メンバーとの詩文上の付き合いも多い。彼の紹介で清国公使館員たちとの交流が始まったといってもよい。また拙稿「同人社社員大野太衛とその『近史偶論』」は日本人として同人社に深くかわり敬宇の学生で継承者ともいえる大野太衛を取り上げている。中には王治本をはじめ同人社メンバーの信夫恕軒、吾妻兵治や尹致昊などについても触れている。そして同じ敬宇に教わり、『同人社文学雑誌』にも寄稿した井上哲次郎の漢文著述を紹介する拙稿

「井上哲次郎の漢文著述概観」がある。

上記の思想人物編に対して、後半は文体と言葉の問題を取り上げている。『同人社文学雑誌』に中島雄「文字改革論ノ未ダ卒カニ行フベカラザルヲ論ス」と和田文「書語口語同ジキヲ欲スルノ説」がある。いわば言文一致論として最初のものである。そういう意味で李長波「もう一つの「言文一致」は中村敬宇と加藤弘之の講演・演説、論説文の文体を調べ、言文一致体の「である」の成立に焦点をあてている。同じく木村義之「『同人社文学雑誌』に見る国語国字問題」も文体、つまり言文一致に関する議論を拾い上げ位置づけようとしている。そして、木村一の「『同人社文学雑誌』の外国語のカタカナ表記から外来語へ」では時代的な要素も含め、外国語から外来語かの問題について扱う。最後「『同人社文学雑誌』総目録」は、従来の「『同人社文学雑誌』総目録一・二」「学苑」二五・二五三（近代文学研究室、一九六一）と「中村正直と『同人社文学雑誌』『普連土学園研究紀要』十四（野村純代、二〇〇七）に基づいて再整理したもので、本書の引用した篇章の確認に便利である。

本書の編集は私が成城大学での最後の仕事となる。十六年間成城大学に勤務しているが、この書物をもって成城大学での教学と研究に一応の区切りをつけたい。本書の執筆者に感謝するとともに、出版を引き受けてくださった三省堂の山本康一氏のご厚意にお礼を申し上げたい。最後に本書の出版にあたって成城大学民俗学研究所の出版助成を受けていることを記しておく。

注

- (1) 高橋昌郎『人物叢書 中村敬宇』吉川弘文館、一九六六年、一四七頁

- (2) 徳富猪一郎『人物管見』国民叢書・第二冊、民友社、明治二十五年五月
- (3) 『日本近代文学大事典』の「中村敬宇」（大久保利謙執筆）を参照。
- (4) 「中村敬宇 儒学とキリスト教の一接点」前田愛著作集第一巻『幕末・明治期の文学』（筑摩書房、一九八九）二二三頁
- (5) 同上二三頁
- (6) 同上二二頁
- (7) 『敬宇中村先生演説集』中村正直述・木平讓編、松井忠兵衛、明治二十一年四月
- (8) 石井研堂「中村正直伝——自助的人物典型」（成功雜誌社、明治四十年二月）八四頁
- (9) 『佐波文庫仮目録』（東京女子大学比較文化研究所、一九五九）に、實海新報四、六号とある。東京日清社、（清国人・王漆園編集、第六号で終刊）
- (10) 時習堂は江戸新橋と京都とにある。ここは後者の幕末の蘭医・広瀬元恭のほうを指す。同様に「蘭晩書屋」「時習堂図書章」の両方を押された図書は『古今和遠鏡』『略解千字文』などがある（国書データベース）。
- (11) 陳力衛「近代訳語のいわゆる転用語について——「文学」と「教育」を例として」『中国語学』二二八号、二〇二一年
- (12) 易惠莉（二〇〇二）八頁
- (13) 羊城[Canton]小書會、同治十一（一八七二）年、毛裝一冊（七頁）、二二四mm
- (14) 「日本中村正直者、維新之太儒也。嘗譯英國斯邁爾斯氏所著書、名曰《西國立志編》、又名之為自助論。其振起國民之志氣、使日本青年人人有自立自重之志氣、功不在吉田、西郷下矣。今將其原序錄出、雖嘗鼎一臠、猶足令讀者起舞矣。」（任公「飲冰室自由書・自助論」清議報第二十八冊一九七頁、一八九九年九月）「又曰、我之身即我之第一好帮手也。凡事有所待于外者、則其精進之力必減、而其所成就必弱。自助者、其責任既專一、其所成就亦因以加厚。故曰天助自助者。」（京時客稿「國民十大元氣論（一名文明之精神）」光緒二十五（一八九九）年十一月二十一日、清議報第三十三冊第二二〇頁）
- (15) 南北戦争後の合衆国で著された、市民的自由と自己統治に関する書籍の邦訳。原著は、Francis Lieber, On civil liberty and self-government, 3rd edrev. 1875 年、邦訳者は林董（一八五〇—一九一三）。
- (16) 敬宇の「西稗雜纂」に跋を書いた沈子星は実は中国のキリスト教関係者である。漢口で中文月刊『闡道新編』（一八七六年停刊）、『益文月報』を発行し、多くのキリスト教関係書籍を出版した。『引家歸道一卷』（英國楊格非撰、清沈子星書、光緒十九年漢鎮聖教書局刊本）、『徳慧入門』（大英楊格非著、金陵沈子星書、上海美華書館、一八七九）などがある。
- (17) 先生絶筆の「望岳樓」に対して、重野安繹が次のような漢文の賛があった。「余與君交四十餘年、情如骨肉……今对其心書、恍

乎如相見、遂揮淚而書之。」「中村正直伝…自助的人物典型」(石井研堂、成功雜誌社、明治四十年) 九七—九八頁

参考文献

- 秋山勇造(二〇〇四)「中村敬字の『同人社文学雑誌』」「人文研究」一五三号
易惠莉(二〇〇二)「日本漢学家岡千仞与王韜—兼論一八六〇—一八七〇年代中日知識界的交流」『近代中国』第十二輯
遠藤道子(一九六六)「中村正直の生涯…留学願書を軸として」『法政史学』十八号
佐佐木滿子(一九六五)「吾妻兵治の『訳詩』」「學苑」三二二号、昭和女子大學近代文化研究所
肖朗(一九九八)「近代日中文化交流史の一断面——中村敬字の『擬泰西人上書』を中心に」『日本歴史』六〇三号
杉本邦子(一九九九)『明治の文芸雑誌——その軌跡を辿る——』明治書院
高橋俊昭(一九九二)「中村敬字と英語辭書」『英学史研究』第二十四号
高橋昌郎(一九六六)『人物叢書 中村敬字』吉川弘文館
野村純代(二〇〇七)「中村正直と『同人社文学雑誌』」『普連土学園研究紀要』十四
萩原隆(一九八九)「中村敬字著作目録上・下」『名古屋学院大学論集』二五(四)・二六(一) 社会科学篇 名古屋学院大学総合研究所
狭間直樹編(二〇〇二)『善隣協会・善隣訳書館関係資料——徳島県立図書館蔵「岡本章庵先生文書」所収』(東方学資料叢刊第十冊)
京都大学人文科学研究所漢字情報研究センター